

18世紀の医学薬学の架け橋になったツェンペリー

日本薬史学会 高橋 文

スウェーデンの医師、植物学者ツェンペリーは安永4年(1775)にオランダ商館付医師として来日、約16カ月滞在し、その間に商館長に随行して江戸参府旅行を行った。彼の来日の目的は日本の博物、とくに日本植物の研究であり、1779年に祖国スウェーデンに帰国して5年後、真っ先に刊行したのが『日本植物誌』であった。師リンネの分類方法と命名法によって書かれた本誌によって、日本植物誌の近代化はなされたとされている。

ツェンペリーはウプサラ大学医学部で9年間学び、さらにパリへ留学して医療技術を磨き、西洋の最新の医学・薬学を身につけて来日、多くの日本人と交流を結んで彼らに西洋の医療を教え、また彼らから日本に関する多くの情報を得て、『ヨーロッパ・アフリカ・アジア旅行記』(1793)中の日本の部分に描写している。今回は医師ツェンペリーに焦点をあてて、彼が教えた駆梅剤の水銀水の処方について、その内容、ヨーロッパでの使用状況、日本における受容の経緯などを中心に以下の順に述べる。

- 1、 ツェンペリーが9年間学んだウプサラ大学医学部について
 - 1740年にロセン・フォン・ロセンステーン、1741年にカール・フォン・リンネの2教授が就任、学部の充実、発展に大きく寄与
- 2、 来日前の医学論文
 - 1767年 論文「リンパ管について」、1770年 論文「腰痛について」、
 - 1773年 論文「誤って食べ物に使用された鉛白による事故の記述」
- 3、 水銀水療法について
 - ・ツェンペリーの記録
 - 1776.12. Bäck あて手紙、1784.11. 「日本国民について」の講演、
 - 『ヨーロッパ・アフリカ・アジア旅行記』3巻1791、4巻1793
 - ・オランダ通詞の吉雄耕牛著『紅毛秘事記』(写本)中の記録
 - 水銀水の成分に加えて、用量・用法を記述
 - 水銀水を記した西洋の書籍を記す
 - ・ファン・スウィーテンの記録
 - 1755. 7. 23、この処方を記したロッテルダムの医師あての手紙
 - 1758. 『軍営地に見られる病気の短い記述と治療法』中の本処方
- 4、 ファン・スウィーテン水の水銀水などの使用の状況
- 5、 ファン・スウィーテン水の日本における受容の経緯

以上により、20世紀の医学者らが18世紀の駆梅療法の実の進歩であり、ヨーロッパの医学に影響を与えたと評価するファン・スウィーテン水を、日本に初めてもたらした医師、ツェンペリーについて紹介する。

ツェンペリー (Carl Peter Thunberg) 略年表—2013. 08. 03

- 1743.11.11. スウェーデン、Jönköping に生まれる
1761. ウプサラ大学入学、医学・植物学を学ぶ
1767. リンネの指導により論文「リンパ管について」の審査終了
1770. シドレーンの指導により論文「腰痛について」の審査終了、医学士
8. 13. 海外留学の奨学金を得てウプサラ発、パリへ
12. 1. パリ着、8カ月滞在、内科、外科、博物学を学ぶ
 パリ留学中に日本への旅が決まる
1771. 7. 18. パリ発、オランダへ
- 8.30. アムステルダム着、オランダ東インド会社に勤務
- 12.30. 東インド会社船に員外外科医として乗船、南アフリカへ
1772. 4. 16. 南アフリカのテーブル湾着
- 6.15. 南アフリカ滞在中にウプサラ大学より医学博士号授与される
 ~ 1774. 南アフリカ内陸へ3回にわたる旅を行う
1775. 3. 2. 東インド会社船に員外外科医として乗船、バタビアへ向う
- 6.20. 東インド会社船に上級外科医として乗船、日本へ向う
- 8.14. 長崎着、オランダ商館付医師として滞日
1776. 3. 4. 商館長フェイトの侍医として出島発、江戸参府へ
- 4.27. 江戸着、長崎屋で桂川甫周、中川淳庵らと会う
- 5.25. 江戸を発ち、帰路につく
- 6.30. 出島に帰着
12. 3. 帰国のため長崎を出帆、1カ月後バタビアへ着く
1777. 7. 7. ジャワ発、同月末セイロン島コロomboへ着く
1778. 2. 6. セイロン島発、南アフリカケープへ向う
- 5.15. ケープ発、10月オランダ着、東インド会社の職を辞す
1779. 3. 19. ロンドン経由、スウェーデンに帰着
1781. 3. 5. ウプサラ大学植物園長と公開講義の担当官になる
11. 7. ウプサラ大学員外教授
1784. 9. 7. ウプサラ大学医学・植物学教授
 王立科学アカデミー会長、『日本植物誌』刊行
- 1785,(1795, 1804, 1814) ウプサラ大学学長
1788. 『ヨーロッパ・アフリカ・アジア旅行記』第1巻刊行
1793. 『ヨーロッパ・アフリカ・アジア旅行記』全4巻の出版完了
1823. 『喜望峰植物誌』の最終部をシュルテスの協力を得て出版完成
1828. 8. 8. ウプサラ郊外のツナベリーにて死去、享年八十五歳